



## 言葉凸凹 標準の光 C と D65

色は照射される光の質が違えば、違って見えるという性質がある。重さや長さは物理量と呼ばれるが、色が心理物理量と呼ばれる理由の一つである。

そのために色を測定したり判定する場合を考え国際照明委員会は、複数の「標準の光」(CIE standard colorimetric illuminants)を制定している。その中の二つが「標準の光 C」と「標準の光 D65」であった。

「標準の光 C」は可視波長域の平均的な昼光であり、「標準の光 D65」は紫外域を含む平均的な昼光である。

私は 1950 年代から 60 年代にかけて、合成樹脂用着色剤の開発や検査の仕事をしていたので、判定に使う光源は重要であった。

一般に色を見るのは紫外線を含む自然光の下であり、晴天時の北窓から入る光の下で判定をしていたが、夜や曇天時は透明なタングステンランプにデビス・ギブソンフィルターをかけて相対色温度を 6774K にした C 光源の装置を使用していたが、やがて D65 の蛍光灯が開発され、これに移行していった。

LED 電球への急速な置換に伴う、蛍光灯の製造中止と後継ランプの未開発問題はこれからどうなるのだろう。 (永田泰弘)

## ● 季語集の中の色名一 9

### ● 仲秋の季語 (続き)

赤蜻蛉 (あかとんぼ) : 体が赤く、秋晴れの日、群れをなして飛ぶ。(茜トンボ)

紅葉 (もみじ) : 木々の葉が秋になって紅くなるのをいふ。

初紅葉・薄紅葉・夕紅葉・照紅葉・庭紅葉・山紅葉・巖紅葉・奥紅葉・谿紅葉・雑木紅葉・漆紅葉・はじ紅葉・白膠木紅葉・梅紅葉・柿紅葉・櫻紅葉・葡萄紅葉・蔦紅葉・残る紅葉

黄葉 (もみじ) : 木々の葉が秋になって黄色になるのをいふ。

草木黄ばむ (くさききばむ) : 草木の葉が秋になって黄ばんで来ることをいふ。

黄葉季 (くわうえふき) : 檜・櫟などの葉が黄色になる頃のことをいふ。

銀木犀 (ぎんもくせい) : 木犀の種類で花の色は白である。金木犀より香が乏しい。

草紅葉 (くさもみじ) : 山野の草の紅葉をいふ。(草の錦)

藍の花 (あいのはな) : 蓼の一種で二三尺になる。葉で藍玉を作り染料とした。花は細い紅花である。

茜草 (あかねそう) : 山野に自生する蔦性。この根を昔は染料とした。秋に穂状、黄色の花をつける。(あかねかずら) (永田泰弘)

## ● 色名に採用したい季語一 2

色票の色指定は、十分な検討を加えてから、確定する必要がある。今は仮の指定色として扱っていく。

● 木蓮色 (もくれんいろ)・蘭春 葉を付けぬ梢に咲く紫木蓮の暗紫花の色を指す。(C70 M100 Y40)



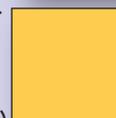
● 辛夷色 (こぶしいろ)・蘭春 モクレン科の落葉高木で白色の六弁花の色。(Y4)



● 紅椿色 (べにつばきいろ)・蘭春 赤い椿の花弁の色をさす。赤椿色ともいう。(M90 Y20 K10)



● れんぎょう色・蘭春 モクセイ科の落葉低木で葉の出る前に鮮やかな黄色の花をつける。(M20 Y80)



● 金盞花色 (きんせんかいろ)・蘭春 キク科の黄橙色の花。こがねぐさ、長春花。(M100 Y40)



● 紫雲英色 (げんげいろ)、蓮華色 (れんげいろ)・晩春 マメ科。田の緑肥にする。(M40)



● 桜貝色 (さくらがいろ)・晩春 ニッコウガイ科の二枚貝。花貝、紅貝。貝細工に使用される。(M20 Y5) (永田泰弘)

